

# 私たちの暴力と彼らの暴力

李在錫

金春洙<sup>キムチュン</sup>には「花」という韓国でもつとも愛読される詩がある。その前半をあげてみたい。

私が彼の名を呼んでやるまえ  
彼はただ

一つの身振りに過ぎなかった。

私が彼の名を呼んであげた時

彼は私に近寄り

花となった。

地域新聞である『ムドウン日報』のインターネット版に、「柿木」に関わる記事が載っていた。韓国の南の都市、光州<sup>グァンジュ</sup>で、ハ・ジョンウンという人が長崎から柿木を購入し、二回に渡って植えた。一本は、二〇〇〇年光州ピエンナレが行われた会場の前に植えしたが、ピエンナレ終了後、無惨にも抜かれ、二〇〇一年に植え直したもう一本は枯死してしまったという。元在日韓国人で、現在光州私立美術館名誉館長である氏が、市議会の場で、柿木一本も管理できなかった行政当局と市民たちに抗議の意を伝えただのである。氏の抗議は「柿木」の枯死だけにあつたのではなく、

無関心な（名を呼んでくれない）人々に向けられたものであつたようだ。本誌の裏表紙にある「被爆くすの木2世」のように、枯れてしまった「柿木」も長崎で被爆を耐え抜いた「被爆柿木2世」だったのである。「名を呼んでやる」「名を呼んでもらえる」ことなしに、花（意味）が近寄る（花となる）ことはない。氏は原爆（暴力）に対する意識（関心）の低さを悲しんだのだろう。氏は被爆柿木2世を光州に植えた趣旨について次のように語る

被爆柿木を光州に植えたのは、光州が文化と人権の都市というイメージを広く知らせ、子供たちに極限の状況の中でも生き残った強靱な生命力を学んでほしかった。

深い象徴性をもつ木一本も育てることのできない市と市民たちを理解し難い。

氏のいう「象徴性」とは、「人権」と「強靱な生命力」を指しているのだろう。一九八〇年の光州民主化運動にむけて行われた「人権」の蹂躪と、それを乗り越えて民主化の礎石となった市民たちの「生命力」が絡んで絶妙なレトリックとなっている。

韓国では、「原爆」が関心の領域となつたことはほとんどなかった。というのも、被植民地状態、解放、独立段階におけるイデオロギーの対立と混乱、朝鮮戦争、南北の分断、自由党独裁と不正、学生運動、軍部のクーデタ、朴正熙の独裁、大統領暗殺、またもやクーデタ、軍事独裁の再来へと続く激動の中にいて、いわゆる民主化が確立され始めたのはやっと一九九〇年代に入つたことであり、「原爆」が歴史の惨禍として意識される（視線を置く）ための余裕を持てなかつたのである。それに長崎で被爆され死んでいった（推定）一万人の朝鮮人に対し、国の次元で積極的

に問題化したこともない。原爆で死んだ人々が、なぜそのような境遇に立たされなければならなかったのか、彼(女)らの死は何かを残してくれたのか、などについては議論の対象ともならなかったのである。弱者は、歴史の陰に葬り去られたといつても過言ではない(そもそも、「国家」の立場に立った視線をもって眺めると、「国民」あるいは「民衆」は歴史の消耗品のようにみえるものなのだ)。

韓国文学において、小説や詩の素材となつたのは、被植民地時代の苦難へ朴景利(パク・ギョリ)の長編小説『土地』や南北分断と共産・民主イデオロギーの対立へ崔仁勳(チェ・インフン)の『広場』―主人公は、南北を捨て第三国を選択する、それから独裁からの自由(民主化)に関わるもの(金芝河(キム・ジハ)などの詩)であり、それだけそれらは切実な問題だったのである。(範疇としての)韓国において文学的な成就や成果といわれるものは、肌で感じられる「生存」の問題から得られたケースが多い。それに、もつとも大きな傷痕を残した被植民地状況を考える時、「原爆」の非人道的な暴力性及び凄惨に死んでいった人々の悲しみは共有できても、人間による暴力に苦しんできた韓国人々にとつて(上海での臨時政府の樹立と活動や、国内外での独立運動の成果があつたにせよ)原爆の暴力は、人間による暴力に喘いでいた人々にとつては、人間による暴力から解き放たれる一要素として認識されたりしたのである。ハ氏が看過したか、それとも認識できなかったのは、そのような側面だったのかもしれない。暴力に対する省察がなされる前に、「核」を素材として取りあげた一つの長編小説が時勢に迎合する(これは読まれるだろうと計算済みの)形で発表され、大反響を呼び起こした。同時に批判や自省の声も。

### 原爆(暴力)への憧憬

金辰明<sup>82</sup>の小説『ムクゲノ花ガ咲キマシタ』(全三巻、ヘエナム、一九九三年八月。<sup>83</sup>日本語訳としては、金辰明著、方千秋訳『ムクゲノ花ガ咲キマシタ』徳間書店、一九九四年八月がある。以下、『ムクゲ』と略記)は、四〇〇万部(韓国の人口は四千八百万人程度であるのを想起してもらいたい)も売れた超ベストセラーである。李輝昭(イ・フイソ) (作中では「イ・ヨンフ」という実在した在米韓国人の物理学者(韓国物理学会と東亜サイエンスが国内物理学教授と企業の研究員一〇五名を対象に設問調査した結果、李輝昭は韓国最高の物理学者として選ばれた)をモデルとし、朴正熙(パク・ジョンヒ)前大統領の核開発プランを阻止するために、物理学者を殺害し大統領までをも暗殺した<sup>84</sup> アメリカの陰謀を掘り下げてゆくある(天才的)記者の物語である。最終的には、アメリカの妨害にもかかわらず、南北合作で核爆弾を造り再び侵略してくる日本へ向けて核ミサイルを発射する。ただし、ミサイルをある無人島に落とす寛大さをみせつつ小説は終る。彼の文法(これは氏の文法であつて、韓国の文法ではない。ただ、氏の文法が流行つたのは確かである)は、アメリカの干渉を排除し、暴力の手段を得て、過去に受けた暴力にし返しをしたいという意識の露骨化であつて、やたらと単純明瞭なものである。左の頬を打たれたら、同じく、相手の左の頬を殴れ、である。同時に、過去の傷痕がいかに深かつたのかを反証する事件でもあつたのだといえよう。

核(原爆)に対する注目すべき大衆性を獲得した作品が『ムクゲ』であつたことは極めて不幸なことである。暴力には、もつと

大きな暴力をもって立ち向かうべきだというイスラム原理主義者や爆弾三勇士みたいなレベルだからである。やられたら、必ずやりかえすという意味で、それからそのような行為が賛美される限り、極言すれば、韓国版『忠臣蔵』であろう。忠誠の対象が主君から国家へとすりかえられただけである（ひとつ付け加えるとすると、韓国の昔話などから復讐を褒め称えるものはめったに見られない。最後には、だいたい和解や容赦で終る）。

筆者が初等学校（＝小学校。今は初等学校だが、私にとつては、いわゆる「国民学校」のままだった）の時、教科書から教えられらものの中に、イ・スンボク少年の話がある。北朝鮮の武装したグループが彼の家に押し寄せた。反共イデオロギーをもって自らの（実際には、独裁の連続だったにもかかわらず）民主主義の正当性を教育させたこともあって、イ少年は「私が共産党がきらいよ」と叫び続けた末、殺害されてしまう。去年だったろうか、その事件が捏造されたものだという報道に対し、イ少年の親類か誰かが訴訟を起こしたとの記事を読んだ。捏造だったのなら良さそうなのだが、実話であったようだ。そのような悲劇を、反共という名目で教えられた私たちは今、いかなる大人になっているのだろうか。教えられた通りに反共大人になっているのだろうか。答えは、ノーである。大衆とは複雑で難解なものには鈍感である。さっぱり明快なほうが喜ばれるのである。しかし、最後まで騙されることもない。

### 金辰明文法への批判

韓国では、インターネットの一般化によって、だいたいの社会

文化的なイシューはその空間の上で激論が行われ、一定の世論を形成してゆくのが現状である。インターネットの公論形成効果は大統領選挙などからすでに実証済みである。金辰明についても、いくつかの注目すべき論議があり、ここでは「世紀末の韓国と金辰明の小説」<sup>※</sup>を簡略に（核に関わる箇所だけ）紹介したい。以下、「世紀末」と略記する）「世紀末」では『ムクゲ』を次のように比喩する。

ここに、並々ならぬ努力の末、他を抑えるほどの知力と力を持てるようになった子と、外に出るのを恐れ家の中で戸を閉めたがゆえに、力を備えることが出来なかつた子がいるとしよう。そして、弱い子を強い子が殴り蹴り支配しながら苛めたとしよう。この時点で、善悪の区別は明確である。強い子が、強いからといって人を苛めるのは正当化できないことであり、したがって弱い子が同情を買うのは当然である。しかし、弱い子が、いつまでも自分がどうして苛められたかに対する意識を欠けたまま、被害意識だけを膨らませながら強い子を非難し、ひいては力を備えて強い子がやったとおりに、その子を苛めてやりたいと考えているとしよう。それは正当化できることであろうか。（略）「目には目を」式の、野蛮な思考の方式を二〇世紀の末葉に、何の批判なしに提示したこの本は、作家金辰明の隠された無意識（侵略的軍国主義）を露骨にした本であった。（略）周知のように『ムクゲ』が読者たちに発信したのは、弱小国家として強大国に対抗するために核をもつべきだというメッセージである。

聖書を例として考えると、金辰明の思考は「旧約」の世界である。「目には目を、歯には歯を」という発想の単純さであり、やり返すための手段として「核」を容認するのである。(いうまでもなく、弱い子は「韓国」であり、強い子は「日本」である)この論理は、それほど大したことではない。世界では、それを実行してもしるのだから、類似した思考も存在する。ある対象を脅威として(あるいは潜在的な危険)設定し、それに対抗するという名目で暴力の所有を容認させた例はいくらでもある。ところが、それで脅威という障害から自由になれるのか、といえば絶対そうはいかないのである。引用からも簡単に導出できるのは、暴力の連鎖である。「新約」においてイエスは、「旧約」の単純な暴力図式を変えてこう語る。「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」\*6と。それだからこそ天国へ入るのはなかなか難しい。だが、それが出来れば天国は遠くないのである。

様々な歴史・社会・経済的な苦難の韓国近現代史からようやく解き放たれた時点で、「原爆」を眺める視線が「暴力」への羨望であったのは、さぞアイロニカルで悲しい事実であるとしかないようがない。でも、それが歴史の反動に起因することを知るとき、もつとやりきれなくなる。

### 韓水山『カラス』

さて、ようやく「原爆」を暴力としてみようとする作品がつい

先日発表された。作家韓水山が、今年の六月に十五年の時間をかけて長編小説『カラス』全五巻を出した。一九四四年から四五年八月までの間に、朝鮮から徴用され、長崎の端島で酷使された後、そこを脱出したが、その甲斐なく、長崎で被爆し死んだ被爆朝鮮人たちの悲劇的な生を描いた作品だという。「作家の言葉」「作家後記」を引用してみよう。

祖国の名で生き、祖国の名で死んでいったが、その屍骸さえ祖国の名において捨てられた長崎被爆朝鮮人たちの英霊にこの本を捧げます。

一九四五年、原爆投下で現代史の傷痕として残っている都市、長崎。毎年八月九日になれば、原爆の投下された中心部に助成された平和公園では、原爆の犠牲者たちを哀悼し、平和を祈願する式典が行われる。

公園には、裸の男が両手をあげたまま、眼を閉じて座っている形をした巨大な記念像が建てられている。空を指している右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を象徴し、閉じた眼は原爆犠牲者たちの冥福を祈る意味をもっていう。しかし、この作品を造った彫刻家の北村西望が、この平和の象徴を手掛けた同じ手で、多くの軍国主義者たちの彫像を造った人であることを知るとき、両手の示している意味は変ってくるしかない。(略)

平和公園の巨大な彫刻とは離れた爆心地の近く、隅つこのところに建っている小さな石碑がある。黒い石に刻まれたものは、「追悼」という二字だけである。その下に小さく「長崎原爆朝鮮人犠牲者」と刻まれている。

原爆で死んでいった名もなき朝鮮人のため、名もなき日本人が謝罪の心を込めて建てた石碑である。それだから、この追悼碑には石を刻んだ人の名も、字を書いた人の名も、それから建てた人の・・・名もない。ここで死んだ人たちのように。

帝国主義日本に連れて行かれ、どれほどの朝鮮の靈魂たちが呻吟し命を落としたことだろう。異国の地、九州の各地で奴隷のように酷使され死んだ人々。屍骸さえ祖国に戻らず、その地に埋葬された人々の体のうえで、春になれば草は生え、冬になれば木の根は骨を土と化す。火葬された骨は、壺に盛られたままお寺の地下で蜘蛛の巣に捲かれ、永い歲月のあいだ捨てられた。(略)

長崎港から西南方向に小さい三つの島がある。その一つが端島である。海岸から眺めると、軍国日本が誇った軍艦土佐が海に浮かんでいるようだといって軍艦島だと名づけられた。その島に、五〇〇人を超える朝鮮人が戦争の渦中に連れて来られた。(略) 島全体が、地下七〇〇メートルまで掘りすめられた海底炭鉱であった。(略)

ここまで強制的に連れて来られた朝鮮人は消耗品であり奴隷であった。端島は日本人の民族差別と朝鮮人軽蔑のなかで繰り返された酷使と虐殺の凝縮された痛恨の島である。日本の過去を照らす歴史の鏡として、端島はすでに廃墟と化した。朝鮮人の苦難を証言する資料となっている。

産業、軍事基地に強制動員されて消耗品として消えていった朝鮮人たちの恨を、今日その島は語らない。ただ、波

打っただけである。炭鉱初期に死刑囚や長期囚たちを採炭作業に追い込んだ島であるので、日本の人たちさえも地獄島と呼んだその島で何事があったのか。故郷を後にし、玄界灘を渡ってここまで連れて来られた人々が、どこへ行つたのか、そしていかにして帰ったのか、誰も知らない。死んでいった人々だけが言えるのだ。しかし、死んだ者には言葉がない。(略)

日本の画家である丸木夫婦は(原爆で死んだ人々が台風によって海に流される姿を「引用者」この惨状を絵で描いた。屍骸に食いつくカラスの群れの間に、真白いチマ・ジヨゴリ一つが浮かんでいる絵である。そして次のように書いた。

屍にまで差別を受けた朝鮮人。屍にまで差別した日本人。美しいチヨゴリ、チマが。飛んで行く朝鮮、ふるさとの空へ  
(下略)<sup>47</sup>

筆者も一年前、平和公園を訪ね、巨大な男の下に数えきれないほどあつた紙で折つた鶴を眺め、祈禱をした。それから爆心地へも足を運んだ。いつかNHKで放映された端島も覚えていた。日本で、人口密集度をもっとも高かつたというナレーションだけが記憶に残っている。いったい、人間って何なんだろう、と答えることのできない質問をくちすむだけである。

『カラス』がいかなる読者を生み出すかは時間を待つしかなく、ここでは作家がこの作品に取り掛かるようになった契機を紹介することで留めておきたい。皮肉にも、作家が被爆朝鮮人たちをテーマとして作品を書くきっかけを提供したのは、いわゆる「国家」という制度、すなわち、軍部の検閲である。一九八一年の筆禍事件(新聞連載小説の表現を口実に、当時の軍部は作家を連行し、人間

以下の暴力をふるったと伝えられている)後、心の安静を求めて渡ったところが日本である。その後、在日朝鮮人たち取材する過程で、被爆朝鮮人問題に接し、多大な資料の収集と証言などを通して作品化に至ったという。

### 「視線」の落差

金辰明と韓水山のつた「原爆」への視点は正反対に位置する。指摘されている通り、金辰明の「原爆」に向けられたスタンスは実態や現状認識の欠けて漠然とした通説や感情から生まれたものであるのに対し、韓水山の「原爆」への視点は長年(氏は十五年をかけたのである。一九八九年、私は大学一年生であった)の現地調査や証言などによって具体化されたものなのである。<sup>\*</sup>

『ムクゲ』は、感情を高ぶらせ、ある一つの意識をもつことを煽動する。反面、『カラス』は作家の「読者たちが(略)『現在の私たち』を顧みるように努めた。単純な過去史の証言を羅列することはあまり意味がない。いまだら日帝時代を素材として作品を書く理由はないのではないか。加害者であれ、被害者であれ、この小説を通して人間と歴史に対する根本的な反省ができればと望む」(『文化日報』<sup>クラフアイルボ</sup>六月九日十九面)という言葉からもわかるように、苦痛とともに共有すること、「被爆」自体からそれが問い続ける現在の私たちの問題まで、過去を回顧すること自体ではなく、そこから現在をいかに形成してゆくべきかを訴えているのである。氏の小説は政治的な色彩を帯びない(政治的に受け取る人間がいるかもしれないが)。武力への志向もない。その基底には人間への憐憫と、いったい植民地や強制徴用、被爆などの人間を支配

した事件はいかなるものだったのかについての省察がある。韓水山の『カラス』がどれほど読まれるだろうか、筆者としては期待の膨らむことである。

### 見えてこない現在

以上のことから自然と思いつかんでくるのは、韓国にとつての核問題である。実際、韓国において、(韓国は九〇年代初、非核化宣言を行っている)核とは生存を脅かす脅威でしかない。というのも、北朝鮮の核開発という現状から自由ではいられないからである。無関係でいたくてもいられない。それに、その問題は日本、中国、アメリカなどの国際関係を抜きにして語ることもできない。かなり複雑な力学をもつて作用しているようだ。個人的には、地政学的にもはるばる遠いアメリカが北朝鮮の核問題の中心になっているのに疑問を抱いており、(ほんとうに脅威であるのなら)韓国・日本・中国にとつてもっと切実な問題であるのだから、議論や調整は近隣諸国においてもっと活発であるべきではないのか(裏返していえば、それほど大した問題でもないこととなる)、などと考えたりもするが、それは私の論議できる範囲でもないし、このエッセイでも相応しくないものである。ただし、そこに「人間存在」の問題が無視されていることは指摘しておいても良さそうだ(悪い奴がいるなら、殺してしまうといい、というのだろう)。ある人はアメリカが旧式兵器を(韓国と日本、台湾に)売りさばくために、この地域の緊張は必要であつて、在り難くもその緊張を北朝鮮が維持してくれているともいう。換言すると、国防という名目で軍事化を正当化できる口実(アメリカの国益にかなう)を北

朝鮮が買って出ているというのだ。それもアメリカと組んで。いかに事態を平和的に解決できるかの模索ではなく、もしもの時にやり返す準備を急がせるというのだ。その場で人間は名目ばかりである。多くの人々が騙されているのかもしれない。

韓水山の小説が物語るのは、限りなく悲惨な人間性抹殺の現場の証言である。換言すると、暴力の実態を暴くのである。国家の論理と個人の論理が合致することはない。それぞれの論理は別の段階にある。ところが、(だいたいは「国家」の方から働き掛けるのだが)個人としての人間は国家の意志が自らの意志と同一なものであって、自身の利益と合致するのだと思ひ込んでいるようだ。

国家が核をもっていれば、個人もパワーを備えたことになる。錯覚している。いざ衝突が発生すると犠牲になるのは「国家」ではなく、「個人」でしかない。金辰明の論理は、まさにイデオロギ―化された「国家」の論理であり、自らを「国家」と重ねているのだ。「国家」の論理によって「個人」がハッピーになれると嘯いているのである。「国家」という名をもつて犠牲になるのは「個人」だけである。原爆によって焼き殺されたのは「私」<sup>わたし</sup>なのだ。対極的に、韓水山は「国家」の論理によって「カラス」の餌になつてしまう「個人」を凝視し、ともに苦しんでいる(特に、被爆朝鮮人らは韓国からも日本からも捨てられた存在なのだから)。そもそも文学は「国家」(権力一別の言い方をすると、定型化された図式)に反抗的なのである。ある利権や制度・統制など、「個人」を支配する枠を取り払おうとする。それだから、文学は「国家」にとつては役に立たないものである。同じく「個人」が「国家」の視座で文学を見るととき、それがなんの役にも立たない(定型化

の中で従順することを否定するので)ものとして見られるのも当然である。「個人」の視点を「個人」へと取り戻すこと、すなわち「原爆」の問題を政治問題として「国家」の問題と考えるのではなく、人間という「個人」の問題として置換することが(すべてではないとしても)求められるのであり、そのようなことを(特に)長崎と広島が先導的にやっているといるのだと思う。その面において、韓国は後進性を免れないともいえる。

「国家」は絶対に「原爆」(ここでは「被爆」)を「個人」の問題として語らない。否、そもそも語ることなどできない。傷ついた「個人」を救えるのは「個人」でしかなく、「個人」を救うなどと言いふらず「国家」は「個人」を欺瞞するだけである。つまり、個々人の総意によって成り立つ「国家」と、個人たちを支配する「国家」とは別のものなのだ。

私たちが、「原爆」の名を呼ぶ行為を冒頭の詩に例えると、名もなきものを「花」だと名づけることである。「原爆」を消費財ではなく、生産財とするために「呼ぶ」行為をしているのだ。なぜなら、呼ばれないものに存在はないからである。呼ぶというのは対象を实体化させる。斜めに切った竹をみて、それは竹槍だ、と呼んだら、「竹」は「槍」となるのである。いったい、私たちは何を「呼ぶ」べきなのか。お互いに「忘れられない一つの意味」になるよう呼ばなければならぬ。その意味とは、「人権」である。人権の守られるところで、平和はペアーとなつて生まれるのだ。

冒頭の詩「花」はこう続く。

私が彼の名を呼んであげたように

私のこの色と香気にふさわしい

誰か私の名を呼んでほしい。

彼の方へ行つて私も

彼の花になりたい。

私たちはみんな

何かになりたい。

私は君に君は私に

忘れられない一つの意味になりたい。

最後に、一つだけ付け加えたいことがある。この文章を書く私と同名異人である「李在錫」氏についてである。被爆者である氏の訴訟がいかに進んだのかではなく、あるひとの「際限のない韓国人の厚かましき」という文章が気になってしょうがない。簡単にいえば、その文章（「国家」だけがあって、「人間」のない）を書いた人は、もう韓国に帰つていながら持続的な補償を求める李在錫氏の行動が厚かましいというのである。新聞やテレビで、「海外に住む原爆被害者にも手当」を支給することになったとか、一方では慰安婦問題や被爆者訴訟が一括棄却されたなどという報道に接する。補償や訴訟棄却などの問題とは別に、訴訟を起こした人たちの祈願は「個人」のもつ人権や平和などへの意識を「国家」のものへとまで拡張してほしいと願つたのではなからうか。そこで指摘したいのは、前の「厚かましい」というレトリックから、「国家」と自らを同一視する現象と人間の存在に対する冷たさが

発見できることである。（人間の暖かさではなく、人間を包んでいる国家のドライさである）その文章を書いた人は、自分＝国家の図式をもつて考えており、それだから李在錫氏を韓国人一般と同一視することは必然である。李在錫氏のような被爆者が韓国で十分な援護を受けてきたかどうかを考えると、たぶんそうではないだろう。一定の補助を受けるようになったのも十年來のことではなからうか。私たちの傍にいてほしいのは、国家としての人間ではなく、いつしよに悲しんでくれる人格、つまり人間としての個人、願わくば人間としての国家なのである。

今日も学校からの帰り道（その昔、汽車が走っていたと思われる散歩道）の両側に「ムクゲ」の花が咲いているのを眺めながら（死んだ柿木を思い浮かべつつ）、虫に食われることなく（ムクゲは虫に弱く、育てるのが難しい樹木として有名である）きれいに花を咲かせたことに心の安らぎを得る。いかに育てるか、それが問題なのであろう。

（日本語訳は筆者によるのであり、もし誤訳などがあるとすれば、その責任はすべて筆者自身にある。）

## 注

1 金 春 洙（一九二二〜）慶南忠武で生まれる。四二年日本大学

創作科除籍。四七年処女詩集『雲と薔薇』以後、中学校教師で働きつつ旺盛な創作活動を展開。六〇年代から慶北大学などの教授を経て、八一年には国会議員に当選。韓国詩人協会賞、大韓民国文学賞などを受賞。

2 人名において漢字表記ができない場合があるが、韓国では名前を

漢字で表記することはめつたに見られなくなっているからである。日本で韓国人の名前が漢字表記されるのは便宜のためであり、そもそも漢字名をもっていない場合も増えている。

3 『原爆文学研究』Iで、私はこの小説について「多くの人を同時に高揚させ、集団幻想を引き起こさせるような『読み物』は、大概つまらない」とだけ書いた。

4 朴大統領の死については、犯人が早々と死刑に処されたため、いわゆる真相は明らかにされていない。

5 [<http://free.taegu.ac.kr/~libinfo/2000/sd.htm>] (大邱大学校文献情報学科)

6 マタイによる福音書五・三八―三九「復讐してはならない」(ルカ六・二九―三〇) 共同訳聖書実行委員会『新共同訳 聖書』日本聖書協会、一九九一。

7 丸木夫婦の文章は次の本からの引用である。(丸木位里、丸木俊著『鎮魂の道』岩波書店、一九八四年七月) 石牟礼道子「菊とナガサキ―被爆朝鮮人の遺骨は黙したまま」『朝日ジャーナル』一九六八年八月十一日号は、長崎で被爆された朝鮮人の死骸をこう述べる。「原爆がおっちゃけたあと、一番あとまで死骸が残ったのは朝鮮人だったよ。日本人はたくさん生き残ったが朝鮮人はちつとしか生き残らんちゃったけん。どがんもこがんもできん。からすが空から飛んでくるけん、うんときたばい。朝鮮人たちの死骸の頭のみん玉ば、

からすがきて食うとよ。からすがめん玉食らいよる。」丸木、前掲、七九頁から再引用。

8 韓氏は日本近現代文学にも詳しく、文学紀行などもたびたびやっている。「若いハートに染みる傷―取材ノートの中の太宰治」(パク・ヘスン訳『太宰治の帰郷』ジンファ、一九九三年四月。『津軽通信』『津軽』『グッド・バイ』の翻訳)という二六頁分量の「はしがき」などがいい例となる。初版にとどまることの多い小説の翻訳本が重版印刷までできたのは、おおかた韓氏の威光であつたろう。一般的な指摘の範囲を超えないが、彼にとつての太宰治とその小説は次のように表現される(読者向けの記述であることを覚えておきたい)。「彼は、もしかしたら若者の精神的な傷なのかもしれない。彼を読むことは、若い時の傷である。それだから、その傷が治った時、若者は彼から離れる。そして太宰は残る。一人でそこにいる。子供は成長して若者になり、太宰という若い傷に出会い・・・(略)その小説の主人公たちは、若かった日の私にとつて大きな支えとなつた。それから、私が彼を、彼の小説を離れたとき、私はもはや若者ではなかつた。私は、悲しみに耐えることもできなし、待つことも出来なし、生きてゆくことの尊さにも目覚めていた。」(帯にある文章から)彼は、太宰治に「日本」というものを結びつけることなどしない。あくまで、太宰治と彼の小説に個人として付き合う、つまり、個人と国家ではなく、個人と個人との関係においてである。